

## 生徒の興味・関心に基づいた自由研究を実施

岩手県立花巻北高校では、2015年度、全学年において「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）を「自由研究」を軸に展開することとした。個別大学における入学者選抜が多面的・総合的評価による方法に変わる中で、「変化する社会を生き抜くたくましさ」を身に付けさせたい。「生徒が推薦入試やAO入試で自己を語れる題材となるような取り組みを盛り込みたい」「そのためには、総合学習で探究型の活動を行ってはどうか」といった声が校内で高まっていた。

# 「総合的な学習の時間」を検証し、 学ぶ力を更に育む取り組みへ改善する

## 岩手県立花巻北高校

学校が生徒の特性や志望進路に合った教育活動を展開するために、生徒の実態を踏まえた教育課程の編成とその実施、そしてそれらを評価・検証するカリキュラム・マネジメントをどう実践していくのか。2015年度に「総合的な学習の時間」で新たに探究型の活動を導入した岩手県立花巻北高校で行われた、「次年度に向けた活動の振り返り」から考える。

## 生徒の興味・関心に基づいた自由研究を実施

そこで同校では、14年度後半より総学検討委員会を立ち上げ、他校の事例の分析を重ねた。委員会の中で、重要なキーワードとして浮かび上がったのが、「自由」だ。教師があらかじめ研究テーマを設定したり、生徒に所定のカテゴリーの中から研究テーマを選ばせたりせずに、生徒が自分の興味・関心に基づいて自由なテーマを設定できるようにしたのだ。「自由研究」とした背景には、生徒の主体的な活動を促す狙いと、取り組みにおける教師の多忙感を軽減す

る配慮もあった。他校の事例を研究する中で、教師が多忙感や負担感を持つたり、特定の教師に業務が集中したりすると、取り組みが継続しにくいことが分かったからだ。

自分が知らないことを教えるのは準備に時間が掛かり、負担になる。そこで、「研究は生徒に任せて、教師はアドバイザーに徹する」という方針が委員会で共有され、教師の得意や興味・関心を一覧化して生徒に提示はするが、それはあくまで生徒のテーマ設定のヒントにとどめ、生徒は個人またはグループで自由に研究テーマを決めて、半年〜1年間の研究に取り組みることとなった。

### 岩手県立花巻北高校

- ◎ 「黒橋魂」と「校雲臺精神」を受け継ぎ、文武両道をモットーとする。弓道部やアーチェリー部など、全国レベルで活躍する部も多い。言語活動を重視した対話型授業を研究するなど、アクティブ・ラーニングを推進。授業に関する生徒の提言、要望に基づいた授業改善にも積極的に取り組む。
- ◎ 設立 1931（昭和6）年
- ◎ 形態 全日制／普通科／共学
- ◎ 生徒数 1学年約240人
- ◎ 2015年度入試合格実績（現役のみ）  
国公立大は、弘前大、岩手大、山形大、東北大、福島大、筑波大、岩手県立大などに165人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、東京理科大、日本大、法政大、早稲田大などに延べ184人が合格。
- ◎ URL <http://www2.iwate-ed.jp/hkn-h/>

## 研究の自由を保証し、モチベーションを維持させる

### 研究成果以上に 学び方の獲得を重視

振り返りではまず、「自由」を根幹に据えた探究型の活動の成果を語り合った。

**川村** 生徒が興味・関心に基づいて自由に研究テーマを設定するスタイル



**川村俊彦** かむら・としひこ  
岩手県立花巻北高校副校長  
教職歴31年。同校に赴任して1年目。「知識ではなく、学ぶ意欲と態度が生徒の将来をつくる」



**熊谷道仁** くまがい・みちひと  
岩手県立花巻北高校  
教職歴25年。同校に赴任して4年目。教務主任。「学び続け、考え抜き、やってみる。自分の高校時代を忘れない」



**及川智春** おいかわ・ともはる  
岩手県立花巻北高校  
教職歴18年。同校に赴任して1年目。1学年担任。「世界の広さを自ら測ろうとする人間を育てたい」



**木村総司** きむら・そうじ  
岩手県立花巻北高校  
教職歴16年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。「人とのやりとりを大切にできる教師でありたい」

ルは、次年度も続けたいです。自由研究の目標は、「高いレベルの研究成果」ではなく、「学び方を学ぶ」ことにあると最初に決めましたよね。研究成果に重きを置きすぎると、教師が指導できるものの中から研究テーマを選ばせ、教え込むといった構図になり、結果的に生徒の主體的な学びはあまり育たず、教師の負担感も増してしまいます。知識の伝達作業にとどまらず、大学や社会でも役立つ「学び方」を学ぶためには、我々教師が「私も分からない」と正直に言い、生徒に「君はどう思う?」「まずはやってみたら?」と、学びを任せることが今後大切だと思います。

**熊谷** 理想は、生徒が自由に発想し、教師は見守るという状態です。教えることが使命である私たちには、まさに発想の転換が必要でしたが、生徒の研究に対する取り組み方は前向きだったと思います。取り組みを始めるに当たって、私は『VIEW21』

図1 2015年度「総合的な学習の時間」高校生の『自由研究』～学び方を学ぶ～

#### ●目標

- ①社会における諸課題を的確に捉え、問題解決能力を身に付けること。<前に踏み出す力>の育成
- ②主体的・協同(協働)的に学ぶ姿勢を確立すること。<チームで働く力>の育成
- ③自分の興味・関心がある分野を研究・追究、「得意」を見だし、自らの言葉で表現できること。<考え抜く力>の育成

#### ●調査研究テーマ設定時の留意事項

- ・1年での完結型とするが、3年間、あるいは2年生から3年生までの2年間同じ内容を研究し、深化させることも出来る。
- ・3年生は、大学で学びたいことを中心に研究を深めるとよい。
- ・小学校の時に取り組んだ「自由研究」の高校生版と考える。
- ・「これだったら、飽きずに徹底して調べられる」具体的なテーマを探す。
- ・完璧な内容に仕上げようと思必要はない。まずはとことんやってみよう。

#### ●教師の役割

本校の全ての教師が、自分の得意に基づいて助言する。(指導はしない)

#### ●生徒

グループ(4人程度)での研究を原則とするが、1人での研究も可。

#### ●企画

総学検討委員会(8人)が企画・準備し、主担当者が進める。

\*学校資料を基に編集部で作成

#### ●活動の流れ

**5月** 本校の全教師が自己申告した「得意、興味・関心リスト」(P.19 図2)を参考に、生徒は各教室に待機した教師に相談をしながら、個人またはグループで自由研究のテーマを検討する。(2日間実施)

**6月** 担任に研究テーマを提出。総学検討委員長が各グループまたは個人に助言を行う教師を振り当てる。

**6月** 自由研究スタート。総合的な学習の時間では、図書館所蔵の文献とグループ内1台のスマートフォンを利用した調査を行う。休日や長期休業を活用してフィールドワークや実験などを行う。

**12月** グループごとに研究成果を所定の用紙にまとめて提出。

**1月** 総学検討委員会によって選考された研究グループまたは個人が発表。優秀研究の表彰。

**2月** 自由研究の発表要旨を掲載した冊子を作成。

高校版2015年4月号の特集を何

回も読みました。特に、京都大の松下佳代先生の「『探究テーマ』学術研究的なテーマ」とらわれない」「テーマが自由になるほど、探究のプロセスが重要」という言葉は、生徒の自由を活動の根幹に据える上で支えになりました。実際、生徒は自分でテーマを決めたからこそ、研究のモチベーションを保てたのだと思います。

**木村** 研究成果を見ても、生徒は分らないこと、知りたいことを時間を掛けて調べたことが分かりますね。安易な「コピペ」もとても少なかったです。そもそも、答えが簡単には分からないような研究テーマを設定したので、万が一、コピペしようとしたとしても出来なかつたでしょう。

### 「もっと頑張りたい」を総合学習の文化にしたい

**及川** 生徒の自由を尊重した分、研究テーマを考える時間をたくさん取ったのは良かったと思います。私たちが作成した得意、興味・関心の一覧(図2)を参考に、いろいろな先生やクラスメートと対話を続けながら、自分の研究テーマ(図3)を

考えたのが、そのままモチベーションの向上につながったのでしょうか。

**熊谷** もちろん、中には「自由研究なんてやりたくない」と思っていた生徒はいたでしょう。ただ、どの教科でも、「こんな勉強、やりたくない」といった生徒は、少数であっても存在するものです。そうした現実を目を向けずに、もれなく全員を一生懸命取り組ませようとすると、学校全体が疲弊してしまうことを、教員間でスタート時に共通認識できていたことも良かったと思います。

**木村** もちろん、自由研究という活動に価値を見いだせない生徒を見捨てるというわけではなく、他の生徒の充実した様子を目にして、「自分も、もっと頑張れたかもしれない」と悔しい思いをさせることで、次の学びへとつなげさせていきたいです。その意味では、3学期に行われる優秀研究の発表が重要ですね。

**川村** 優秀研究の発表で、同じ学校の仲間が素晴らしい活動をしたことを知って、「来年はもっと頑張ってみよう」と思う生徒がたくさん出てきた時に、「学び方を学ぶ」活動が学校の文化になるはずですよ。

## 2015年度「総合的な学習の時間」振り返り——改善したいこと①

### 生徒の自由度を更に高めるために担当制の廃止を検討

#### 自由研究では生徒が教師を凌駕する

——続いて、今年度の取り組みで課題だと感じた点を自由に述べ合った。そこで上がったのは、「自由研究」にかかわる教師の姿勢だった。

**及川** 生徒は「自由」な研究を楽しんだ一方で、私たち教師は「指導ではない」「正解を教えるわけではない」といった立場にまだなじめていなかったように思います。「生徒の研究が進むように適切な指導をしなれば」と悩んでいる同僚もいました。今回の総合学習の枠組みをつくった委員の1人として、「教師はあくまでアドバイザーでよいのですよ」と説明はしましたが、それでも「生徒の一步先に立って、導かなければいけない」といった考えから脱却することは容易ではなかつたようです。

**熊谷** 今年度、本校では推薦・AO入試でも例年以上の成果が出ました。そこで先日、推薦・AO入試合格者に、総合学習での経験が入試のどのよう

なところで生きたかを聞いたところ、

「志望理由書作成や面接の際に自由研究のエピソードを盛り込んだ」「面接などで自由研究について紹介するとはなかつたけれど、様々な知識を関連付けて話すことが出来たという点では、自由研究の経験が生きたと思う」などと、自由研究の成果を挙げる生徒が大半でした(生徒たちの声はP.20参照)。しかし一方で、「自由研究が進むと、先生よりも自分たちの方がテーマについて詳しくなるので、担当の先生は決めないでもらいたい」「担当の先生がいると、他の先生に意見を聞きに行きにくい」といった声も上がりました。

**及川** 「他の先生に相談に行きにくい」とは、我々は随分生徒に気を使わせていたのですね。生徒の「先生よりも自分たちの方が理解が進む」という意見は、「生徒よりも一歩先んじておかなければいけない」と悩む教師の声とは、実に対照的です。生徒の自由度を更に高めることが、生徒、教師双方の悩みを打開するこ

図2 教師の「得意、興味・関心リスト」

| 先生   | 専門教科 | 「得意・興味関心のあること」                    |        |        |               |
|------|------|-----------------------------------|--------|--------|---------------|
| 川村俊彦 | 理科   | 何でもOK                             |        |        |               |
| 1    | 英語   | 子どもに関する経験                         | 異文化問題  | 世界遺産   |               |
| 1    | 英語   | 水泳                                | 家庭菜園   | トレイルラン | 食べ歩き          |
| 1    | 英語   | 山菜                                | バイク    | 釣り     | エスプレント誌       |
| 1    | 英語   | 英語                                | アメリカ文化 |        |               |
| 1    | 公民   | 教育法・教育制度                          | 日本国憲法  | ゲーム理論  | 動物から読み解く青年小説  |
| 1    | 及川智香 | 国語                                | 悠話     | 写真&カメラ | 幕末・明治維新 中島みゆき |
| 1    | 国語   | 村上春樹・東野圭吾・辻野あづさ・初野浩二・川口松太郎 東日本大震災 |        |        | 沖縄の歴史         |

教師の得意、興味・関心を一覧化したものを参考に、生徒は教師にアドバイスをもらいながら研究テーマを固めていった。川村副校長が「何でもOK」と申告したのは、「どんなテーマでも生徒と一緒に考え、学び方をアドバイスする」という教師のスタンスを同僚に伝えるためだ。

\*学校資料を編集部が一部改編

とつながるかもしれません。  
**川村** 教師の得意、興味・関心リストを作成するところまでは今年度通りにしたとしても、それをどう生かすかは生徒に任せてみましょうか。生徒の自由度をもっと高めることを考えてみたいですね。

## 2015年度「総合的な学習の時間」振り返り——改善したいこと② 校外学習の時間の確保を学校の責任で行う

### 「推奨」だけでは 生徒への責任転嫁である

振り返りは「自由研究」の内容にかかわる校外学習にも及んだ。生徒が興味・関心に基づいて研究テーマを決める場合、校外に知見を求める可能性が高くなる。だが、今年度、校外学習に取り組む時間的余裕が生徒になかったという声が上がった。

**及川** 教師は助言者に徹するべきだという考えはその通りですが、教師が指導しない分、生徒には必要に応じて校外にも出掛け、専門家に話を聞くなどしてもらいたかったですね。委員会として、校外調査やインタビューのために、アポイントメントの取り方や文献調査の方法などをまとめた説明書を作成しましたが、期待したほどは校外学習に臨む生徒は現れませんでした。図書館やインターネットで調べるのもよいのですが、実物、本物に触れる機会をもっとつ

くってほしいです。ただ、教科学習や部活動、学校行事で忙しい生徒たちには、「外に出掛けてほしい」と教師が願うだけでは駄目なのだ実感もしています。生徒が外に出掛ける時間を確保できる仕組みを学校としてつくりたいと、責任を生徒に押し付けるだけになってしまいます。

**川村** 実際に足を運ぶのは生徒だけでなく、出掛けることが出来る環境をつくるのは教師の役目です。校外研究日の設定と、そのための課外授業や部活動などとの調整が必要ですね。  
**熊谷** 生徒へのヒアリングでは、「野球部の夏の大会の応援が終わった後など、生徒全員がそろって、なおかつ空いた時間に、博物館などに掛けるようにしてはどうか」といったアイデアも出ていました。

### 学校全体を考える姿勢を 一人ひとりの教師が持つ

**木村** 研究の自由を高めるほど、生

生徒は、個人あるいはグループで自由研究のテーマを設定。教科学習と密接につながったテーマから、高校生の日常の興味と関係の深いテーマまで内容は様々。

図3 生徒の自由研究のテーマ例

| 総合的な学習の時間【自由研究テーマ】       |
|--------------------------|
| 「笑い」の研究                  |
| 「笑い」の研究                  |
| 「笑い」の研究                  |
| BGMがもたらす効果               |
| B T B 溶液は、なぜ色が変わるのか      |
| SNSが社会へ与える影響             |
| アジアの中の日本として、私たちができることは何か |
| アジアの中の日本として、私たちができることは何か |
| アジアの中の日本として、私たちができることは何か |
| 足踏について                   |
| あまのじゃくと神々について            |

\*学校資料を編集部が一部改編

徒が校外に出掛けるための時間を学校として保証することは必要だと思います。ただ、生徒に必要な時間を足し算すると、時間は明らかに足りなくなってしまう。何を重視する代わりに何を減らすのか、今から3月下旬まで時間を掛けて話し合っていかなければいけませんね。  
**熊谷** 教科学習、部活動、学校行事……、どの教育活動も重要です。だからこそ、今の本校には何が重要な

## 2015年度「総合的な学習の時間」に対する生徒の声(抜粋)

- レポート作成などを通して、様々な知識をどのようにまとめていけばよいか分かった。
- 総合学習での取り組みを、推薦・AO入試の面接で話すことが出来た。
- 市の図書館や保健センターなどに行って調べることで、勉強は学校の中だけでは終わらないことが分かった。
- 調べていくうちにどんどん新しい疑問が生まれて、結果的にたくさんの本を手にするようになった。総合学習での経験を通して、調べ方、まとめ方を学べた。
- 海外研修での興味をそのまま終わらせず、更に深めることが出来たのが良かった。
- 専門的に調べていくほど、研究テーマについて担当の先生よりも自分の方が詳しくなる。他の先生にアドバイスをもらいたい時もあるので、担当の先生は決めないでほしい。
- 興味のあることを調べるのにはもっと時間が必要。今年度は半年だったけれど、出来れば1年くらい研究期間がほしい。
- 自分が調べている内容について、担当の先生から専門的な指導をしてほしいとは思わない。ただ、「ここにはこんな資料がある」などと、調べ方についてサポートしてくれるとありがたい。

\*3年生の生徒の声を基に編集部で作成

のかを議論し、議論がまとまらなければ少し時間を置いて冷静になり、「学校として」という大局的な思考・判断も必要です。場合によっては、全員の賛成を待たずに見切り発車することもあるでしょう。その分、取り組みの評価と改善についてしっかりと議論の場をつくりたいですね。

**川村** 結局、教師の視点が「学校全体」や「生徒」になく、「自分」にある限りは、自分の持ち時間にいつまでも固執してしまいます。「自分の教科」「自分の部活動」といった狭い視点で意見を言うのは恥ずかしいと感じるような雰囲気や学校に醸成することは、遠回りのようですが、前向きな議論が出来る学校づくりに欠かせません(コラム参照)。

**木村** 本校は文化祭、体育祭はとも盛り上がりますが、この期間中、課題などを出す先生はほとんどいません。これも、学校行事に集中した方が、その後の高校生活に良い影響があると、「生徒本位」で考えることが出来るからです。私は、更に一歩進めて、「学校行事期間中の課題禁止」を教師のルールとして明文化してもよいと思っています。自由研

究と同様に、生徒を信じるべき時は生徒に全てを任せられた方が、生徒は教

### 「総合的な学習の時間」2016年度の設計に向けて

## 走りながら改善するために育てたい生徒像を語り続ける

### 生徒の自由度を高めれば抜本的な改革も可能に

——総合学習は3学期に優秀研究の発表と研究成果の冊子化を行い、引き続き、2年目へと移行する。休む間もなく継続する教育活動を、言わば「走りながら改善する」のは容易ではない。だが、同校の教師は既に大きな改善を視野に置いている。

**川村** 生徒へのヒアリングでは、「研究の期間は半年では短い」という声もありましたね。例えば、1年生に

対しては、研究の進め方のレクチャーや学年ごとの博物館見学などを実施しながら、半年ほど掛けてじっくりと研究テーマを検討させ、本格的な研究は秋から1年間掛けて取り組みのも一案だと思えます。そして、2年生の秋に振り返りを行い、更に研究を続けるか、別の研究テーマに変更するかを考えるとというサイクルに

師の信頼感を意気に感じ、学校として一丸になれると思います。

してもよいのではないのでしょうか。そうすれば、3年生の後半までしっかり総合学習に取り組めます。生徒の自由度を高めた研究であれば、学年をまたいでも大丈夫なはずで、それくらい大きな枠組みの見直しも今からならば可能でしょう。

**木村** 秋から1年間のサイクルであれば、春休みの期間も研究に使えますね。これは生徒にとって大きなメリットになります。

**及川** 総合学習の改善は確かに大掛かりですが、だからこそ一息置いたりせずに、生徒や教師がリアルな課題意識を持っているうちに、「次年度はどうするか」を考え始めたいものです。まさに、「走りながら、変えていく」発想です。改善しなければいけないことが分かっているうちに話し合いをスタートさせることで、改善の先送りを防ぐことも出来ると思います。



**熊谷** 「学び方を学ぶ」という目標についての検証も続けたいです。今年度は、基本的には生徒の研究レポートを基に担当教師が評価する予定ですが、一番気になるのは、どのような評価をすれば、1・2年生の「次年度の活動へのモチベーション」が高まるかです。生徒の要望が多ければ、A・B・Cなどの段階評価を取り入れてもよいでしょう。ただ、そうした評価以上に、教師一人ひとりが授

## COLUMN

### 働きやすい職場づくりが「学校本位」の価値観をつくる

花巻北高校の特徴の1つが、職場づくりの目線合わせの徹底だ。2014年度に、熊谷先生が同僚から「働いていて困っていること」「こうすればもっと働きやすくなると思うこと」を聞き取りした。すると、「職員室では携帯電話を使わないでほしい」「ゴミは自分の責任で確実に処分してほしい」「外部からの電話にはもっと丁寧に対応すべき」など、様々な声が上がってきた。

「全員が快適に過ごすためには、ルールの明確化と目線合わせが必要だったのに、それが出来ていなかったのです。全員がストレスから解放されれば、落ち着いた気持ちで校務に取り組めると考え、15年度最初の職員会議で、ヒアリングした内容を全員に伝えました」（熊谷先生）

川村副校長は、「教師故に、授業以外のことには気が回らないところもある」と話す。

「教師も社会人であり、より良い職場環境をつくる責任がそれぞれにあります。それを自覚することで、自分の教科、自分の部活動といった狭い視野から学校全体を捉えた広い視点での思考に次第に変わっていくはずです」（川村副校長）

業などで「君の研究の観点で、この事象を考えてみたらどうなる？」などと、総合学習の成果を日々の授業や進路選択に取り込む声掛けが出来るかどうかが重要だと思えます。生徒の成果物を、生徒同士、そして教師が共有できる仕組みづくりも委員会などで議論したいですね。また、生徒や学校について語り合う土壌づくりも継続したいと思えます。本校では、14年9月に、川村副校長の発案で、「どんな生徒を育てたいか」を全教師がグループで語り合う校内研

修を実施しました。印象的だったのは、「型にはまらない生徒を育てたい」という声がとてもたくさん出たことです。

**木村** そうでしたね。だからこそ、多くの先生が「でも実際には、自分たち教師が生徒を型にはめているよね」と日々の指導を振り返っている点で見直す良い機会でしたし、これも「自分本位」ではない、「学校本位」の「生徒本位」の教育観を浸透させる取り組みの1つだと思えました。

**川村** 地域の期待を担っている進学校として、本当に生徒を伸ばすことが出来ているのか、私たち教師は全員、良い意味での危機感を持っています。だからこそ、その危機感をカリキュラムなどの具体的な改善へと結び付けるためにも、3年間掛けてどんな生徒を育てたいのか、教師全員で話し合うことが大切だと思うのです。3学期中には、教科別に「どんな生徒を育てたいか」について話し合う校内研修を行う予定ですが、総合学習だけでなく、各教科の指導についてもまさに「走りながら、大胆に改革する」意識が必要だと思います。

**熊谷** 目の前に生徒がいることを意識すれば、もっと良い活動にしようという優先順位を割り切り、スピーディーに合意形成できます。時間を置いて改まった場を設けると、議論のための議論になり、紛糾しがちです。走り続ける中で、課題を見つけたら迅速に話し合い、手を打っていく組織でありたいですね。